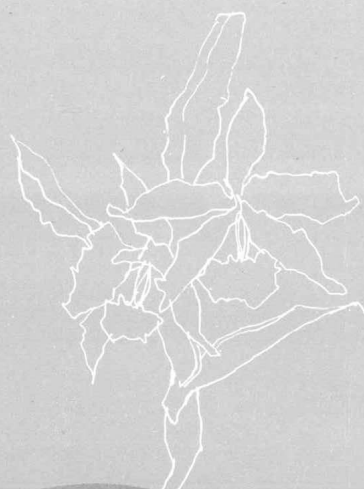


北條誠



ナ
ヒ
が
い
っ
ぱ
い

花がいっぱい

昭和三十七年十二月二十日 印刷
昭和三十七年十二月二十五日 発行

定価 三百七十円

著作者 北 条 誠

発行者 矢 貴 東 司

印刷者 北 山 茂

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋區船場一ノ二二
電話(六七二)四〇〇二、二番
振替東京六四三五一番

落丁・乱丁の場合は
お取りかえ致します

花が
いっ
ぱい
目次

三六 一〇一 一三 一六 一九 二二 二六 二九 三三 三五 三九 四二 四六 四九 五二 五五 五八 六〇 六四 六七

七〇 七四 七七 八〇 八三 八七 九〇 九四 九七
一〇〇 一〇四 一〇七 一一〇 一一四 一二七 一二九 一二三 一二六 一二八 一二九 一三〇 一三三

写起冬美悔孤夜季破黑黑感送世秋燃同暗後真

し　　の　　いい　　別　　え　　い　　鶴
い　　　　　　　　ら　　じ　　記

真	伏	目	恨	独	風	節	局	夜	影	傷	會	ぎ	風	夜	家	憶	悔	峠
九八	九六	九二	八八	八六	八二	七九	七五	七三	六九	六六	六三	五九	五五	五一	四九	四六	四三	三九

幻砂の	帰ってきた男	落葉	このスタジオ	夜の	ベニスの冬	遠い方	来し	昔をいまに	弱まぶたの裏に	黄昏の人	孤木	あなたのローマ	旅人	冬の花	めぐり逢い	編集室
二六六	二六四	二六〇	二五二	二五〇	二四六	二四三	二三九	二三三	二三九	二三五	二三二	二二九	二二六	二二三	二一〇	二〇五

花
が
い
っ
ぱ
い

タレント食堂

A ランチ	八十円
B 和食ランチ（吸物付）	八十円
ライスカレー	五十円
カツライス	六十円
チキンライス	六十円

デパートの食堂のように、陳列棚のガラスケースの中には定価表をつけた見本が、ずらっと並んでいる。

小さなセルロイドの丸い札に、赤で金額の入ったその定価表が、うしろ向きになっているのもある。それはつまり売り切れというわけ。

石浜光子を待つ間の退屈しのぎ……三原千花は陳列ケースの中の品物を、一つ一つ丹念にのぞきこんだ。

デパートのは蠟細工で出来た見本だけど、ここの食堂のは本物……でも陳列したあとはどうするのだろう。捨ててしまうのだろうか……それとも、従業員が食べるのだろうか……

「フフ、馬鹿だわ、私って……一日中陳列してた見本なんて、腐っちゃって食べられやしないのに……」
それが癖で、クスツと首をすくめ舌を出して……それにしても……
「光子さん、おそいわ。四時って約束なのに……」

コーヒー	四十円
紅　茶	四十円
アイスクリーム	四十円
フレッシュジュース	六十円
コーラ	五十円
ジュース	五十円

飲み物の方はそうでもなかったが、食べ物の方は、たしかに表のレストランよりは、ちょっと安い。そのせいで、このセントラルテレビの地下の食堂は、いつもいっぱいなのだろうか。

いつか光子から、近所の病院、学校、会社の人たちが、自分のところの食堂より安いのでみんなこへ食事に来てくるのだと、聞いたのを千花は思い出した。

定価の安さよりも、この食堂は量が多い。それも魅力なのだろう。

そんな千花の耳に

「このごろ、だいぶご飯の盛りが少なくなっただぜ。」

「この小母さんも、儲かるもんでがめつくなったのよ。」

おどろくほど近くで聞こえた。

気がつけば、四、五人、千花と並んでガラスケースの中をのぞきこんでいる。

一人はチョン鬚^{すげ}をのせて、半でん股引岡ッ引姿。一人はキャバレーの場にでも出るのだろう、上半身は辛うじて乳房^{乳房}だけかくしたような、どぎつい衣装の絵姿。そして警官、西部の伊達男……出演者たちなのだ。

リハーサルと本番との間にかけてこんで、腹ごしらえというわけなのだろう。

このセントラルテレビの化粧室に、小学校以来の友達の石浜光子が勤めている。

メーキャップの光子をたずねて、何度か千花は、このセントラルテレビにきて、廊下や食堂で出演者たちの姿も見馴れているわけだった。

しかし……こんなに近くで見るのは初めて。

ドーラン化粧の肌は、何だか荒^{すま}んだ感じだった。衣装も、画面で見るときとはちがって、変にペラペラして、安っぽい。

それよりも、ドーランの匂いなのか、衣装の匂いなのか、傍に寄られると、ふんと鼻を刺すたまたない臭気……

ケースの前を二、三步はなれた千花に、西部の伊達男の声が聞こえよがしにとんできた。

「何でえ……女子学生の役じゃなくて、本物なのか。」

岡ッ引が答えた。

「やりきれねえよ。ああいう面^{めん}のいいのには、プロデューサーの先生たち方、すぐでれつとしてたちまち主役にばってきだ。俺たちは永久に御用々々々……」

十手を持った手をのばして、千花のブラウスの胸のふくらみのあたりに狙いをつけた。

千花は顔色を変えてとびのいた。

下品な笑い声を背中に聞きながら、足早に廊下を歩く。

城南大学国文科四年生……口でこそ、やかましい理論をこねまわしていても、やはり千花などの生活は温室の中だ。

スタジオの廊下や食堂などでは、ざらに見られるそんな悪ふざけやからかいに、仕方もなく胸がふるえていた。

憤りとおそろしさ……自分が汚されたような感じ……このまま、光子には逢わずに帰ろうと思った。その千花の憤った歩みの前方に、白いメーキャップの制服、袖口をたくしあげて石浜光子の姿だった。

黒い瞳

「まあそんなに怒りなさんな。」

光子はいきり立つ千花をなぐさめて、食堂に押し戻した。

「食堂はいやだなんて言たって、他で話す場所なんてありやしないのよ。こうなることわかって、

る筈なのに、小じんまりしたスタジオを建てちゃってさ。この頃じゃ、廊下も食堂も、表玄関の受付の前のロビーも、深夜になればリハーサル室に早変わりさ。このごろの政治家や財界人はみんな胃が丈夫だから、大方ごつてりセメントや砂利を食べた人がいるんでしょ。」

いつものことながら、千花は逢うたびにそんな光子の成長をまぶしいと思うのだ。

高校までずっと一緒。そこで二人は、右と左にわかれた。千花は大学へ光子は美容学校を卒業してこのセントラルテレビのメーキャップ。

二人の家庭が、財力の点で少し差があったというだけなのだ。

しかし、分岐点でのそんな小さな差や偶然は、もういまでは二人の間を、運命のように大きく押しへだてている。

たくましく、そして男まさりな気の強い女に、光子はなっている。そしてほんのちよっぴり、ヤクザの匂いも身についた。

千花の方は相変わらずミルクの匂いというわけだ。しかしそのミルクの匂いに、浮世の風が先ごろから吹きそめたのである。

中小企業の運命を辿って、千花の父の三原俊吉は、工場を明日にも閉鎖しなければならぬという苦境に立たされていた。

そんな状態で、相変わらずミルクの匂いをただよわせて大学をつづけたものかどうか……そんな相談相手と言え、やっぱり昔からの親友の光子の他にはなかったのだ。

しかし……食堂のこんな雑然とした雰囲気の中では、そうした打ち明け話も何か気が重い。

それに、相手の光子は何度か電話で呼ばれて、席を立つという忙しさ。

「またうかがうわ……」

千花は少うしベソをかいて……アイスコーヒーの残りをストローで吸った。

「いつでもいいの。光子さんの体が空いたときに……二、三時間、私に出来ない？」

「それがね……夏場は冷房病っていうのかしら……冷房したスタジオに朝から夜中までいて、みんな少し体をやられちゃうのよ。殊に女は被害続出。メーカーキャプルームでも三人休んじやって、ここんとか当分、無交替ってわけなの。」

「いいえ。すぐじゃなくっていいのよ……」

来月になってもかまわないのだと千花が言いかけたとき、また光子は電話で呼ばれた。

今度はだいぶ長い……

その千花の前の席に、すっと座った。

スポーツシャツの右腕だけ、まくり上げている。抱えていた台本を、ドサツとテーブルの上に置いて、のうのうとめくって

「おい、コーヒー……」

その声も物憂い。

プロデューサーなのだろう。

ニヒルと言えば買いかぶりになるかもしれない。暗い疲れと、投げやりな調子が、乱れた頭からスリッパを突っつけた足の先まで黒くよんでいる。

「あもう……」

千花はためらいながら、つぶやいた。その席はふさがっていると聞いたかったのだ。

しかし、ゆっくり男は顔をあげて……その目のにぶい暗い光に、千花はあとの言葉をのみこんだ。無感動な目は、しばらく千花を見つめて……そこに一瞬、何かが光った。

「君、どこの子だい。」

ヤクザな調子だ。

「今日は、何スタ？」

千花はとっさに、何を言われたかわからなかった。

どこの劇団に所属している女優か……今日はどのスタジオに仕事にきているのか……とわかったのは、しばらくたってから……

「いいえ、お友達に逢いにきたんです。」

千花は少し怒った声だった。

昔なら、女優に間違えられたということ……つまり、あなたは美人だと言われたということ。女にとつて、決して不愉快なことではない筈だった。

しかし今日このごろは……テレビ局の乱立、女優と言っても有名から無名まで、星の数ほど出来てしまったのだ。温室育ちの千花には、あまり愉快なことではなかった。

「化粧室の石浜光子さんが友達なんです。」

「お光の友達か……ま、いい。ちょっと来たまえ。」

男はつぶやいて立ち上がった。

「僕は太木哲……」

否応なしに押しつける調子で歩き出した。

カメラテスト

千花は心底腹を立てていた……

「お光には僕から言っとく。」

「その太木哲と名乗るプロデューサーは、そう言ったのだ。」

何の用事か五里霧中でついて行つて、空きスタジオに入れられた。

太木の物腰には、何か近よれない冷たさがただよっている。その言葉には、何か逆えないような重さが流れていた。そして……

「おい。カメラいれてくれ。」

太木は階段をのぼって、二階のミキサールームに入る。ライトが二つ三つともされて、一台のカメラが、ぐうっと近づいたり離れたたり……横からのぞいたり……二階からトークバックで太木の声がひびくのだ。

「おい、デクの棒じゃあるまいし、少し表情を動かせよ。笑ってごらん。泣いてごらん。」
テストされているのだと気づいて、千花はパッとカメラの前からはなれた。

「おい、駄目だ、動いちゃ……」

トークバックの大木の声には、もう振り向きもしない。スタジオを走り出ると、ばったり光子にぶつかった。

「ひどいっただらない……」

光子に事情を訴えていれば、憤りは哀しさに変わっている。

「そう……ま、ダンナはそういう人なのよ。いつも一方的、いつも独断でね。」
「ダンナ？」

「大木センセのことよ。セントラルテレビの看板男、二年つづけて芸術祭で受賞して、自他ともに許す大芸術家だもんね。」

千花は、さつき食堂で、自分をつれ出すとき

「僕は太木哲……」

と言ったその声音を思い出した。

そう言えば、いかにも、知っているだろう……という思い上がったひびきだった。

大木哲の目にとまったこと、光栄に思え……とでも言うのだろうか。

だがこっけいなことだ……と、千花は思った。

テレビのドラマの安っぱさを軽蔑して、千花は殆ど見たことがない。大木哲という名前も初めて聞いたのだ。去年、一昨年、芸術祭で彼の作品が受賞したことなども、もちろん知りはない。

「お光ちゃん、こういういい友達がいたんなら、何故早く紹介しなかった。」